

期間限定の契約婚のはずが、
冷徹御曹司の独占欲に孕まされました

目次

期間限定の契約婚のはずが、
冷徹御曹司の独占欲に孕まされました

番外編 新しい朝

期間限定の契約婚のはずが、
冷徹御曹司の独占欲に孕まされました

プロローグ

「やめてほしくなったら言えって言ったじゃないですか」
ベッドサイドの淡い光を見つめながら、美咲は息も絶え絶えに抗議した。

彼はイヤだと言えばやめると言った。
だからもう何度もイヤと言い、身をよじって逃げようとしているのに、彼はしっかりと太腿を掴んで離さない。

「うっ……あ……」

堪えきれず漏れる声が静かな寝室に響く。

自分のものとは思えない甘い声に、美咲は泣きたくなった。これではまるで誘っているようだ。
そんな美咲を嘲笑うように、彼は相変わらずやめるそぶりを見せなくて。

背けた顔に彼の左手が伸びてくる。

「こっちを向いて、美咲。それじゃキスができない」

頬に手をかけられて上を向くと、馬乗りになっている彼の顔が近づいてきた。妖艶に光る瞳に吸い込まれそうになる。

「聞いただろう？ 本気かって」

形のいい彼の唇がにやりと歪む。

唇を唇で覆うように塞がれる。口内を舌で蹂躪されながら、わかっていると心の中で答えた。
抱いてくださいと言ったのは美咲だ。

笑うばかりで美咲を相手にしてくれなかった彼。それが悔しかったから――

くちゅくちゅと音を立てて唇を吸い続けていた彼は、唾液の糸を伸ばしながらゆっくりと離れた。
そして、愛おしそうに美咲の頬を撫でる。

「やめていいのか？ 本当の夫婦になりたいんだらう？」

そんなことを言いながら、彼の手は下へと伸びて、硬くなった胸の頂をツンと弾いた。

「っあ……」

「どうする？」

やめてほしいけれど、やめてほしくない。

だって私は、あなたが好きだから――

一、降って湧いた契約結婚

「私に、縁談、ですか？」

「ええそうよ。とてもいいお話でしょう？」

戸惑う美咲に、叔母はにこにこ微笑み、その隣の叔父は真剣に訴えてくる。

「もう二十七なんだから、縁談があっても不思議ではないだろう」

（それはそうだけど……）

思うだけで口にはせず、美咲は顔を落とす。

今、彼女の前にいる叔父は父の弟で、父が経営する町工場『キリ原製作所』の専務だ。父を差し置いてわざわざ美咲だけ外に呼び出された時から、なんとなく嫌な予感がしていた。

でもまさか縁談とは……

桐原美咲、二十七歳。叔父が言う通り、この年になれば縁談があっても不思議ではない。残念ながら恋人はいないので、婚活しようかどうかどうしようか考えていたところだった。

だから今だって、縁談そのものに戸惑ったわけじゃない。

思わず聞き返した理由は、渡された縁談相手の身上書なるものがあまりにも現実的ではなかったからだ。

（株式会社アマグサス、副社長。天城隼人二十八歳）

その年齢で副社長というのも驚きだが、このアマグサスという会社は、天城ホールディングス傘下だ。天城ホールディングスといえばエネルギー系の商社で、テレビコマーシャルもバンバン流しているような大企業だ。

天城という名前から察するに、彼は創業家一族の御曹司だと思われる。

対して美咲はごく一般的な家庭の娘で、秀でた頭脳や特技はない。

WEBデザイン会社のKirariデザインに勤めるWEBデザイナーで、キリ原製作所のホームページ制作やオンライン販売の管理を担当している。管理職でも出世頭でもない、ごく普通のビジネスウーマンだ。

身長百五十八センチのやや痩せ型。肩から背中にかかる長さの髪は、たいした手入れもしないまま後頭部で一つにまとめているだけ。丸顔でやや大きめの黒目勝ちな目、通っているともいえない鼻筋。ざっくりとした白っぽいセーターにデニムのパンツという、大衆によく馴染むファストファッションに身を包んでいる。

胸を張って言うのもおかしい話だが、要するに平凡な体型と顔の持ち主だ。御曹司とのお見合いの場につくことすら普通では考えられないし、釣り合うとも思えない。

何かの間違いでしょ？ と首を傾げるのは当然だと思う。

「いいか、美咲。これはキリ原の未来を左右する大事な縁談なんだ」

叔父は硬い表情を崩さずそう言った。

「それはどういう？」

美咲はおずおず聞いてみた。

「兄さんが開発した技術が、今業界で注目を浴びているのは知ってるな？」

「はい」

美咲の家、桐原家は祖父の代から小さな町工場『キリ原製作所』を営んでいるのだが、つい最近、美咲の父が画期的な再生エネルギーの技術で特許を取得し、業界をざわつかせた。その特許が生み出す利益は相当なものになると見られており、天城ホールディングスの傘下であるアマガスが資本提携を申し出てきたほどだ。

「その件で、様々な会社が接触してきている。いかにも怪しい会社や人物も多い。でも、アマガスならば条件がいいし何よりも安心だ。これから話を進める上で、美咲が彼と結婚すればお互いの安心材料になる。わかるな？」

そう言われても、わかるようなわからないような話である。別に結婚までしなくても普通に契約すればいいだろうにと、美咲は素朴な疑問を抱いて首を傾げた。

「いいか？ 特許を取得してから、キリ原に買収を持ちかけてくる会社や、圧力をかけてくる連中が後を絶たないんだ。正体のわからない者がしつこく訪ねてくることもあって、社員たちも不安がつている」

叔父は声を落として続けた。

「隼人くんは結婚を機に『キリ原製作所』と資本提携したいと言ってきているんだ。後ろに天城

ホールディングスがいるとわかれば、今キリ原を狙っている不屈き者どもはきっぱりあきらめるに違いない」

ああ、なるほど、とようやく合点がいった。資本提携が重要らしい。

「いいことづくめだというのに兄さんは何を迷っているんだか、なかなか首を縦に振らなくてな。離婚歴くらいどうってことないのに」

「離婚歴？」

「ああ、たったの二回」だ。これだけの好条件なんだから、それくらいどうってことないだろう？」

（へ？ 二回も？）

美咲は衝撃を受けたが、叔父の圧がすごくて口にはできず、苦笑交じりに「はい」と頷いた。

天城隼人は二十八歳とまだ若い。一度だけならまだしもすでに二度の離婚歴だなんて、よほど結婚運が悪いのか、もしくは彼のDVや浮気のせいかな。身上書に写真はないが、もしかして耐えられないような容貌とか……と考えたところで、美咲の考えを見透かしたように叔父が言った。

「イケメンだぞ。それもとびきりの」

（えー、とびきりのイケメンで、離婚歴一回？）

ますます怪しくて、頬がぴくぴくと引きつる。

見合いが嫌なわけじゃない。イケメンじゃなくてもいいから、できればごく普通であってほしい。

「あの……お相手の方の離婚の理由は何なんですか？」

叔父はきっぱりと「知らん」と切り捨てた。

(えー、そんな……)

「美咲。今こそ、育ててもらった恩返しをする時だぞ」
身を乗り出して言われ、ズキッと胸が痛んだ。

「恩返し」という言葉が心に深く突き刺さる。その言葉の意味は美咲にとってあまりに大きい。心に重くのしかかり、雑念が一瞬で氷の塊になって崩れ落ちた。

どうせ、好きな人がいるわけじゃないのだ。キリ原のためならば、美咲には断る選択肢はない。それでも一つだけ確認したいことがある。

「ただあの……」と恐る恐る切り出した。

「先方は私が養女だと、ご存じなんですか？」

「大丈夫だ。先方もそれはわかっている。心配ない」

美咲はホッと胸を撫で下ろした。それならばもう迷いはない。

キュッと唇を結んでにつこりと顔を上げた。

「わかりました。その縁談お受けします」

それから話が進むのは早かった。

両親は反対したが、美咲は会うだけ会ってみたいと説得し、お見合い当日を迎えた。

(さあ、いよいよだ)

おろしたてのパンプスを履いた美咲は、玄関を出ると空を見上げた。

一月の冬の空は清々しく晴れ渡っている。これで冷たい雨でも降っていたのでは憂鬱になりそうだが、幸先のいいスタートだ。

「美咲、本当に無理しなくていいんだぞ？」

この期に及んで、父はまだ心配そうだ。父も母もどうしても相手の離婚歴が気になるらしく、叔父に縁談を強要されたんじゃないかと、ずっと気にかけている。

「大丈夫。ちゃんとお話してから決めるし。っていうか、先方から断られたら慰めてよね？ お父さん」

「何を言うんだ。こんなにかわいいのにそれはない」

「もー、親バカなんだからー。でも、ありがと」

冗談抜きで断られる可能性は十分にある。いくらこちらがその気になっても、相手が首を縦に振ってくれなければ話は終わってしまう。無事に資本提携してもらうために断られるわけにはいかないで、今日は精一杯おしゃれをしてきた。

身に着けたのは、カシミアのコートと、その下にハイブランドのベージュのワンピース。お見合いをする高級料亭にどんな格好をしていったらいいか見当もつかず、母とあれこれ悩んだ末に百貨店の店員にお任せして見繕ってもらった。ワンピースは胸元の低い位置にリボンがついていて、上品かつかわいらしい。ハーフアップにまとめた髪も、緩やかにカールした毛先も、プロの手による完璧なメイクで美咲を別人のように変身させてくれた。

全力で作り上げた婚活女子。それでもつけ焼き刃感が否めず心細さが拭えない。

断られてしまうかもしれないという不安も、おしやれが馴染まないのも、今日の縁談の重要さに見合うだけの自信がないからだ和美咲はわかっている。

でもそんなことは言っていられないのだ。引き金は既に引かれているのだから――

美咲は弱い心を振り切るように胸を張って大きく息を吸う。

「すっごく綺麗よ、美咲」

「ありがとうお母さん」

優しい母の声と笑顔に心からの愛情を感じながら、美咲はにっこりと笑顔で応える。

まるでこのお見合いが楽しみだと言わんばかりに明るく笑う娘と、娘を褒める親バカな両親。三人は誰の目にも仲のいい家族に映るだろう。

でも、美咲は桐原家の養女だ。父とはまったく血が繋がっていない。

美咲の実母は、今の母の妹で奔放な女性だったらしい。まだ大学生の時に、子どもの父親を秘密にしたまま美咲を産んで大学を中退したそう。夜の街でホステスをしながら美咲を育てたが、美咲が五歳の時に明け方の裏路地で事故に遭い死亡。美咲は彼女の姉に引き取られ養女となった。

桐原家は経済的にも普通の家で、それほど余裕があるわけではなかったけれど、娘がいなかったこともあってか実の娘のようにかわいがって育ててくれた。美咲が引き取られた後に弟が生まれたが、変わらず家族の仲はいいし、美咲は血の繋がった家族のように大切に思っている。

とはいえ、美咲は自分が養女であるのを忘れたことはない。

「お待ちしておりました」

着物姿の仲居に恭しく出迎えられて足を踏み入れた料亭は、この場所が都会であることを忘れるようになるほど深い静寂に包まれていた。案内されるまま、ひたひたと静かに響く足音の後を追う板張りの長い廊下を進むにつれ、胸の鼓動が少しずつ速くなっていくのがわかった。

通されたテーブル席からは中庭が見えた。鮮やかな緑の葉を持つサザン力が、赤い花をちらほらと咲かせ、雪を薄く被った枝ぶりが侘びた風情を添えている。

「素敵なお庭ね」と母が目を細めた。

小さく琴の音がお正月らしさを残して響いている。椅子にそつと腰を下ろし、緊張を解す優しい音色に少しホッとした時だった。席が温まる間もなくお相手が登場した。

「お待たせしました」

現れた天城家の面々は、ご両親も縁談相手も皆スーツ姿だった。派手さはないのに上流階級らしい余裕のある雰囲気は全身から溢れている。

そしてお相手は、叔父が言った通りとびきりのイケメンだった。天城隼人二十八歳。身長百八十三センチ。脚が長くて肩幅がしっかりあるためか、濃紺のスーツがとてもよく似合っている。あまりに眩しくて、つい目が泳いでしまう。しかし――

（見覚えがある、ような気がする……）

簡単な挨拶を交わして早速食事が始まった。親たちが話をしている横で、美咲は心の中で密かに首を傾げた。

(でも、これほどのイケメンもお金持ちも、知り合いにはいないし)

となると、雑誌やネットの記事で目にしたとも考えられる。切れ長な目は一度見たら忘れられないような魅力があるし、なにしろ二度の離婚歴がある人だ。これほどの見た目なら恋愛スキャンダルが絶えない人かもしれない。

箸を進めながら、美咲は正面に座る隼人をちらりと見た。

彼は軽く微笑みを浮かべながら親同士の会話を聞いているようだ。

前髪はすっきりと横に流していて、秀でた額に長い睫毛に縁取られた目。理想を形にしたような高い鼻に、意志の強そうな口元。斜めを向いた顔は、驚くほど整っている。こんな顔に生みたいと見本にされそうな美しい顔立ちに、滲み出る存在感は、まるで芸能人のよう。

もしこの縁談がまとまったら本当にこの人と結婚するのか。

湧くのは疑問ばかりで現実味がない。まるで、ちょうど目の前に並んでいる料理のようだ。美術品のように美しくて、食べ物かと疑いたくなるのと同じ。

「ね、美咲？」

ハッとして顔を上げると十個の目が美咲に集中していて、母が苦笑した。

「もう、この子ったら、すっかり緊張しちゃって。美咲は走るのが好きだっていう話をしていたのよ」

「は、はい。走って汗を流すのが好きです」

美咲は慌てて答えた。

「あらそう。だから美咲さんはスタイルがいいのね」

隼人の母にそう言われて、頬を赤くしながらうつむく。

中学高校と陸上部で走っていた。特に速いわけでもないが、走ることが単純に好きだった。今も真夏以外は朝のランニングを続けているので、標準体重を超えたことがないのはそのせいもあるのかもしれない。

でも女性らしい凹凸は少ないので、スタイルがいいのとは関係ないと思う。かといってここで反論はできないけれど。

その後は、集中して親たちの会話に耳を傾けた。

美咲の両親が隼人にいくつか質問した。仕事は忙しいのでしょうか、帰りはいつも遅いのですかとか。

彼は柔らかな微笑みを浮かべたまま、そつがない返事をする。

美咲が聞かれたのは仕事の話くらいで、大きく戸惑うこともなく無事に会食は済んだ。

「それじゃあ、私たちはお先に失礼しましょう」

隼人の父がそう切り出した。

「ええ、そうですね」

心配していたはずの美咲の両親は、うれしさを隠しきれない表情で席を立つ。

親たちがばたばたと出ていくと、部屋には二人だけが残された。否が応でも緊張は増し口の中がカラカラに乾いた。

なにしろお見合い自体が初めてだし、通ったのは女子大ゆえに出会いもなく、サークルも合コンも参加することもなくここまで来た。こうして男性と二人きりでいったい何を話したらいいのかわからない。頭の中は真っ白だ。

彷徨う視線をテーブルの上に落とせば食後のデザートがある。テラテラと光沢を放つのは大きな栗が入った羊羹だ。普段なら喜んで手を出すところだけれど、そんな気持ちにはなれない。そっと息を吐いて抹茶の入った茶碗に手を伸ばし、渴いた喉を潤した。

「申し訳ないんだが」

静寂を破ったのは彼だった。

「はい？」

慌てて、茶碗をテーブルに戻す。

「実は急な仕事が入ってしまった——車で送らせてもらいながら話するのはどうだろう？」

「ええ、もちろん大丈夫です」

忙しいのは理解できる。彼は副社長なのだから当然だ。早速席を立とうとすると「食べてからで」と羊羹を勧められた。

「ご一緒にしたい気持ちは山々だが、和菓子はちよつと苦手で。よかつたらこれもうぞぞ」

彼は自分の分の羊羹を美咲に差し出し、電話をかけてくると言って一旦部屋を出た。

（うわー、緊張したあ）

一人になると途端に気持ちが落ち着いてきたので、栗羊羹に黒文字を伸ばした。

口にした羊羹はほんのりと塩気が感じられ、栗の甘さと相まって胸がいつぱいになる美味しさだ。差し出された彼の分をどうしようかと悩んだけど、残したらきつと料理人はがっかりするだろうと言いつつ訳をしていたのだ。

（美味しい！）

密かにガッツポーズをする。

彼が戻ってきたのは彼の分の羊羹を食べ終わってから間もなくだった。

「じゃあ、出られるかな？」

「は、はい」

会計はすでに済ませていたらしく、笑顔の仲居に見送られて店を出た。

「落ち着かなくて申し訳ない」

「いえいえ、気にしないでください」

彼の車は、高級感漂う黒い外車だった。女性慣れしているのか、流れるような仕草で助手席のドアを開け「どうぞ」と促してくる。

「ありがとうございます」

男性からこんな風にエスコートされることに慣れていない美咲は、どぎまぎしながら助手席に乗った。頬どころか耳まで熱くなる。

素敵——その一言に尽きる。こうもイケメンでスマートで資産家な彼が、二度も離婚をしているのが心底謎だ。

どうして？ なぜ？ 彼のほうから元妻たちに三行半を突きつけたのか。あるいは、彼には他人に見せない裏の顔があるのか。

あれこれ考えるうちに、車は緩やかに発進する。

「実家？ それともマンションがいい？」

「あつ、マンションで。で、でもお忙しいでしょうから、どこかの駅で降りしていただければ十分です」

美咲の実家も一人暮らしのマンションも、キリ原製作所の近くにある。場所は東京でも二十三区外の町田市で、車だと都心部のここから一時間近くかかってしまう。

「大丈夫。相模原に行くついでだから」

「そうですか。すみません、ありがとうございます」

車の中で二人きりというのは思いのほか緊張するものだ。大きな外車とはいえ距離が近い。ドキドキ高鳴る胸を鎮めようと、細く息を吐いた時だった。

「その様子じゃ、まったく覚えていないみたいだな」

信号待ちで止まった拍子に、彼がそう言った。

（えっ？）

ハッとして横を向くと、彼はちらりと美咲を見つめて皮肉な笑みを浮かべる。

（見覚えがあるのは気のせいじゃなかったの？）

誰？ と必死に考えて、遠い記憶の中に眠る「彼」を思いついた。これほどのイケメンとなれば

心当たりは一人しかない。でも――

すると彼は窮屈そうに上着を脱いで後部座席に放り投げ、袖をまくって腕の傷を見せてきた。

うつすらとだが十センチほどの傷痕がある。「これでもか？」と言われてハッとする。

「タカ、先輩？」

彼は肯定するようにやりと口角を上げる。

信号が青に変わり、彼はすぐに前を向いた。彼の横顔を呆然として見つめた美咲は、息を呑んでうつむいた。

（どうして隼人なのにタカというあだ名なの？）

そんな疑問が伝わったのか、「隼人の字、『隼』から鷹を連想したんだろう」と、彼が言った。

「ああ……そうなんですわね」

（やっぱりタカ先輩なんだ）

天城隼人。中学時代の一学年上の先輩だ。テニス部のエースで、学校中の憧れの存在だった。無口で硬派、女の子にはぶっきらぼうだったけれど、そのくせ優しく。女子に抜群の人気を誇っていて、美咲も例外ではなく、密かに恋い慕っていた。

陸上部だった美咲とテニス部の彼は、本来なら接点はないはずだった。それでも縁あって仲良くなり、美咲にとって特別な存在になっていたのに、ある出来事をきっかけに二人の関係は終わった。それ以来、彼とは疎遠になり、もう会うことはないと思っていたのに――

あれは美咲が中学二年生の時。

美咲と仲がよかった幼馴染の良和とタカ先輩が、取っ組み合いの喧嘩をしていた。そこに駆けつけた美咲が、タカ先輩に向かって叫んだ。

『やめて！ あんたなんか嫌い！』

ハッとしたように止まった彼は、良和に殴られ、倒れた先には大きな石があった――

美咲が叫ばなければ避けられた事故だった。

自分のせいで彼は……

十年以上も昔とはいえ忘れようもない。思い出した今だって胸が痛いんだから。

その時から、美咲は自分のせいで彼が怪我をしたと、ずっと自分を責めてきた。

「あ、あの……今更ですけど、あの時は、本当にすみませんでした」

いたたまれず、運転席に向かって深く頭を下げる。

少なくともあんな酷い言葉を言うべきじゃなかった。彼に傷を負わせただけでなく、あの言葉によって、想い出を最悪で終わらせてしまった自分を何度呪ったことか。

「悪いと思うなら体で返すか？」

「へっ？」

ギョツとして彼のほうを向いた美咲は耳を疑った。驚きのあまり調子外れな声が出て、顔が真っ赤になる。

そんな美咲をよそに、前を向いたままの彼の口元はにやりと歪む。

慌てて視線を膝に落とした美咲は、彼の言葉を反芻してはみた。

（か、体で、返す？）

いくら当時は中学生だったとはいえ、思い出の中の前はこんな下劣な冗談を言う人じゃなかった。彼が通れば爽やかな風が吹くような、女子生徒の憧れの人で……

でも、そういえば何か許せないようなことがあって、美咲は彼に幻滅したのだと思いついた。だから「大嫌い！」なんて叫んでしまったはず。

（なんだった？）

その何かが思い出せず考え込んでいると、「冗談はさておき」と彼が言った。

「この結婚には協力してほしい」

彼の声色は打って変わって事務的になり、その端正な横顔からも、感情が消えたように見えた。微笑んでいるわけでもムツとしているわけでもなく、淡々としている。こちらを見た彼は、さつき見せたような皮肉な笑みも浮かべていない。

「協力、ですか……？」

「ああ。一年でいい。それで君は自由になれる」

意味がわからず、彼の言葉を繰り返した。

「一年？」

「一年後、離婚する」

「えっ？」

話の展開に頭がついていかない。

政略結婚の縁談相手は離婚歴が二回あって、しかも実はタカ先輩で……。結婚から一年後、離婚？ 頭の中で一つずつ並べてみて、あらためて驚いた。

「えっと……一年で離婚、ですか？」

「そうだ。一年間、俺と結婚するだけでいい」

戸惑ううちに、再び赤信号で車が止まる。美咲を見つめた彼は、にっこりと笑みを浮かべる。惚れ惚れするようなスマイルに目を奪われているうちに――

「俺と結婚してくれませんか？ 桐原のお嬢さん」

そう言った彼は美咲の左手を取り、そっとキスをした。

二、苦い再会

この結婚について堂々とビジネスライクに話す隼人に、美咲は驚くばかりだ。車を走らせながら、彼は話を淡々と続ける。

「正直に言おう。俺にとつてこの結婚の目的は『キリ原製作所』の技術だ。資本提携が無事済めば、君の妻としての役割は終わる」

彼はそのための一年契約だと言った。

「キリ原とは、これから具体的な交渉に入る。デューデリジェンス、契約締結、関係当局の承認といったプロセスを考慮すると、資本提携まで一年近くかかるだろう」

「で、でもそれじゃ、偽装結婚なんじゃ……」

そんな言葉が思わず口を突いて出た。契約結婚というより、技術を手に入れるための偽装結婚ではないか。

難しい話はさておき、これはもはや共犯者になれと言っているようなもの。

「決して悪いようにはしない。俺が君と結婚することで、『キリ原製作所』を狙う他社はあきらめるだろう。逆に俺が手を引いた場合はどうなるかわからない。違うか？」

ぐっと言葉に詰まる。彼の言う通りだ。叔父も言っていたが、手段を選ばない悪質な企業にも狙

われていると父も頭を悩ませていた。それについては反論できない。

「そう、かもしれません……」

むしろ、きつとそうだ。

「それに」と言葉を切り、彼は意味深な視線を送る。

「うちの親はこの腕の怪我の理由を知らない。知ったら今からでも激怒して、君との結婚に猛反対するかもしれないぞ？」

驚きのあまり息を呑んだ。

まさか、彼はそのためにわざわざ腕の古傷を見せてきたのか。

「結婚が破談になれば、キリ原の件も――」

「ちょ、ちよつと待ってください」

「ん？」

（冗談じゃない！ 十年以上も前なのに？）

いや、そもそも私が悪いんだけど、でも喧嘩したのは先輩と良和で……。混乱しつつ、恐る恐る聞いてみた。

「脅迫……ですか？」

再び信号で車が止まり、美咲を見た彼は事もなげに「ああ」と頷き、口元を不敵に歪めた。

「脅迫だってなんだってする。君と結婚するためにはな」

政略結婚だと理解してこの場に臨んだからには、それなりの覚悟はしていたつもりだ。でもまさ

かこんな展開になるとは。縁談を勧めてきた叔父ですら想像していなかったに違いない。

「もしかして」

「ん？」

「いえ……」

過去二回の結婚も、偽装結婚だったのだろうか。聞こうとしたが、結局口をつぐんだ。過去がどうであれ、少なくとも今の彼はアマグサスの利益のために堂々と脅迫をする。そういう人だ。

（これではもはや、結婚をビジネスにしているみたいじゃないの）

記憶にあるタカ先輩はとても優しく、こんな風に冷徹な感じの人じゃなかったし、突き放すような口調もまるで別人のよう。

（そうか。だから、すぐに気づかなかったんだ）

表情もまとう雰囲気も全然違う。これでは気がつかないのも当然だ。

あれから十年以上経ったのだ。外見はともかく、様々な経験をして誰しも大人になる。美咲だって自分では変わっていないつもりでいるが、人から見れば変化があると思う。

だからといって、こうも変わってしまうなんて。

「どうする？」

運転席に座る彼は懐かしさすら感じさせず、どこまでも冷ややかな目で美咲を見る。

それでも彼はタカ先輩なのだ……

美咲は口角を上げてにっこりと微笑んだ。どうせほかに道はない。

「わかりました。しましう、一年だけの結婚」
でもね先輩、と美咲は彼に心の中で囁きかけた。

（あなたは、私の初恋だったんですよ）

相模原での仕事を済ませ、隼人が都内に戻った時には、時刻はすでに夜の八時を回っていた。

コート車を置いたまま実家の玄関に入ると、住み込みの家政婦が出迎えた。聞けば母は用事があり出かけているらしい。父はリビングにしていると聞き、早速向かう。

天城家は全体的に落ち着いた重厚感溢れる造りになっている。家ではゆったりと気持ちを落ち着けたいという父の意向だ。暖炉だんろの上には、歴史を感じさせる力強いタッチの油絵が飾られ、リビングは深いボルドーの壁紙が照明を吸い込み、部屋全体に落ち着いた影を落としている。

ゆったりとソファに腰を沈めた隼人の父は、業界紙から顔を上げて息子の真意を探るようにジッと彼の目を見つめた。

「どうなんだ。話を進めていいのか？」

「もちろん」

束の間、父は何か言いたそうに唇を歪め、目を伏せて軽くため息を吐く。

「問題だけは起こすなよ。まあお前のことだ。心配はないと思うが」

はいはいと軽くなした隼人は、長居は無用とばかりにリビングを出た。

「ああ、来てたのか」

ちょうど階段を下りてきた一歳年上の兄、一貴かずきと出くわした。

「隼人、お前本当に結婚するのか？」

「ああするよ。本当に」

何か問題でも？　と言わんばかりに小首を傾げ、隼人はおどけた笑みを浮かべた。兄も父同様、本心を探るようにジッと見つめてくる。その表情は結婚を祝福するそれじゃない。

「なんだよ兄さん」

「すまない……お前にばかり」

表情に影を落とす兄の肩を軽く叩いて、隼人は明るく笑ってみせた。

「やめてくれ。それじゃまるで俺が不幸な結婚をするみたいだろ」

この兄は真っ直ぐで純粋な心根の持ち主だ。結婚も政略結婚ではなく、周囲の反対を押し切り恋愛を貫いた。

政略結婚なんぞしなくてもいいというのが兄の信念であるし、父も強要するわけじゃない。だが、政略結婚によって事を円滑に運べるのもまた事実で、それは隼人の過去二度の結婚で身に沁みているはず。

しかしまたしても弟が犠牲になるのかと、心優しい兄は罪悪感に苛さいなまれているらしい。

（なあ兄さん、何が不満なんだ？）

そう胸の内で語りかけた。

政略結婚によつて大きなリスクを回避できる。戸籍が汚れたところで失うものなど何一つないというのに、なぜそんな傷ついた表情をするのか。

そう言ったところで、清廉潔白な兄の心には届かないとわかつている。

世の中は綺麗事だけでは生きていけない。昭和のような泥臭い時代はとうに過ぎたとしても、人の心に渦巻く悪が消えたわけじゃないのだ。清濁併せ呑む^{せいたくあわむ}という姿勢でなければ行き詰まってしまうだろう。

ただ、それでも天城を背負つて立つのは、この誠実な兄であるべきだと隼人は思っている。

(泥を被るのは俺だけでいい)

人にはそれぞれ向き不向きがある。兄に汚れた泥は似合わない。

「しかしお前、今回も」

「それは違うよ、兄さん。俺は毎回本気で幸せになろうと思つて結婚してる。たまたまそれが長続きしなかっただけさ」

表情を曇らせたままの兄に、隼人はこっそりと秘密を打ち明けるように囁いた。

「実は今回の彼女、俺の初恋の相手なんだ」

兄の顔が一瞬で花が咲いたように明るくなる。

「本当か？」

「ああ本当さ。まだ中学生だった頃のな。俺がテニス部にいて、一学年下の彼女は陸上部で中距離

を走っていた。汗を飛ばして走る姿が綺麗だったんだ。久々に会つても彼女は変わっていないかった。素敵な女性だったよ」

自分でも感心するほど、次々にもっともらしい言葉が出てくる。彼女が変わっていないかったのは本のだが、それ以外はたつた今思いついた作り話だ。

「当時は叶わぬ恋だったけどな——そんなわけだから心配しなくていいよ」

「そうだったのか。それはよかった。会うのが楽しみだな」

ぽんぽんと隼人の肩を叩いて喜ぶ兄に、明るい笑顔で応えた。

「じゃあ帰る。お義姉さんによろしく」

「ああ、気をつけて」

兄に背中を向けた隼人は、頬の筋肉をスツと下げる。

初恋……そんな捨て置かれた化石のような言葉で、よくもまあ簡単に納得するものだ。(純情乙女かよ)と心で突っ込みつつ、これでいいと満足した。むしろ兄にはそうであつてほしい。

実家の玄関を出ると、隼人は腕時計を見た。

時刻は夜の九時。さてどうしようかと考える。

ここは赤坂^{あかさか}。天城家の本宅は兵庫^{ひょうご}県芦屋^{あしや}市の六麓^{ろくろく}荘^{そう}町^{ちやう}にあり、滅多に表舞台に出なくなった祖父が祖母と住んでいる。東京と大阪と、仕事をする上で交通に便利な場所にも居を構えており、両親は普段は大阪にいて、ここには主に兄夫婦が住んでいる。

隼人が住んでいるマンションはここから徒歩五分程度の距離にある。会食で夕食も済ませたのであとは寝るだけだが、なんとなくそんな気分ではなかった。

(仁のところでも行ってみるか)

思い立ったのは幼馴染で同い年の友人、氷室仁が趣味で営んでいるレストランバー『氷の月』。

隼人と仁は、母親同士が友人で、それこそ幼稚園児の頃からよく遊んだ仲だ。中学までは公立学校に通わせるという天城家の方針で、隼人は当時父の仕事の関係で一時的に住んでいた町田の公立に、仁は資産家の子女が集まる名門私立小学校に行ったために、一時は会う回数が減った。

しかし、仁は多くの事業を展開する氷室一族の一人で、彼自身も警備会社のほか人材派遣会社『ヒムロス』の役員も務めており、アマダサスにもヒムロスからの派遣社員が多くいる。そんな仕事上の付き合いもあり、なんだかんだと気の置けない関係が続いている。

『氷の月』のオープンは夜の九時だ。

ちょうど開店した頃である。六本木の裏路地にあり歩いてもそう遠くないので、一旦マンションに戻ってから出直すことにした。

堅苦しいスーツを脱ぎ、ラフな服装に着替える。グレーのパーカーにジャケットというラフな服装の彼はいつもより若く、年相応に見えた。

一月の夜は寒い。耳が切れそうなほど冷たい風が吹くというのに、六本木の夜は熱かった。路地から響く怒声に甲高い笑い声。猥雑な通りを抜けて進む隼人もまた風景に馴染んでいた。

学生時代はさておき天城に就職してからの彼は、品行方正とは言えない生き方をしてきた。会議

室だけでは進まない話もある。ゴルフ好きならゴルフを、女や酒が好きならそれなりに用意する。

隼人は酒に強い。飲んでもそう簡単に酔いつぶれないし、華やかな外見ゆえに女性が同席する店によく駆り出された。

以前はこうして歩いていると、ホストだの芸能事務所だののスカウトに声をかけられた。どこか落ち着いた大人の余裕が出てきたせいかそれも最近はめっきり減り、その代わりに呼び込みに出ていた顔見知りのホステスに声をかけられることが増えた。

「あ・ま・ぎさあーん、ちよつと、ごぶさたじゃない？」

「そうか？ 先月行っただろ」

「もうー。そんなこと言わないで毎週来てよおー」

途中、彼に気づいたホストが視線だけで挨拶をしてくる。金髪の彼は時々仁の店で見かける男だった。

路上のゴミ、ふらつく酔っ払い。下卑た笑いで騒ぐ怪しげな男たち。薄汚れた夜の街は隼人をどこかホッとさせる。塵一つない上品な世界よりも、ここはわかりやすい。欲も悪意も隠さず、正直な世界だ。

気づけばいつの間にか、隼人は食えない腹黒男と言われるようになっていた。

それでいいと思っている。何を言われようとまったく気にならないし、むしろ悪し様に言われるほうが性に合っている。天城を守り抜けるならいくらでも悪人になるつもりだ。

なのに、今夜ばかりは重いしこりのようなものが胸の奥で疼く……

ふと部活に汗を流していた中学時代を振り返った。

天城家の教育方針は単純だ。中学までは何も言われない。週末の習い事以外は自由で、地元の公立に通った隼人はごく普通の子どもたちの中で日々を送った。なんの柵もなく、ただボールを追いかけて、コートの中を走り回っていた。

高校からは兄とともに天城を継ぐ者として厳しく育てられた。親と一緒に渡米し、大学を卒業するまで向こうで暮らした。

あの中学時代の自分は、純粹だったように思う。少なくとも他人にはそう見えただろう。

(彼女が俺に気づかなかったのは当然か)と苦笑する。

変わったと自覚できるくらいだから、内面の歪みは滲み出ているに違いない。

彼女は変わっていないかった。

重ねた年齢の分だけ見た目は大人になっていたが、濁りのない真っ直ぐな視線も、醸し出す柔らかい明るさも、あの頃のままだった。隼人には眩しすぎるほどに。

つらつらと考えるうち目的のビルに到着し、冷蔵庫の中のように冷たいエレベーターで昇る。

ちらりと見た案内板に店の表示はない。五階で降りて、そのまま奥に進むと扉がある。扉にはめ込まれたガラスには凍った月から雪が落ちるデザインが施されており、その下に member's only のプレートが貼ってある。ここが『氷の月』だ。

カランカランとドアベルを鳴らしながら扉を開けると、カウンターに座る男が振り返った。

「いらっしやーい」

片方の手を上げて微笑むのはこの店のオーナー、仁だ。黒のタートルネックにダークグレーのジャケットを羽織った姿は、バーの薄暗い照明の下でも際立って見える。

その奥にも見知った顔があり、軽く挨拶を交わしてカウンター席に腰を下ろす。

「軽いつまみと、酒は……」

さてどうしようと思いつき壁に並ぶ酒の瓶に視線を送るうち、カウンターの奥に入った仁がドンと日本酒の瓶を置いた。

「たまには熱燗でもどうだ？ カラスミがあるんだよ。めでたく金粉入りだ」

笑って、じゃあそれをと頼む。

「そーいやどうなった？ “三回目”の結婚は決まったのか？」

三回目を強調する仁を軽く睨む。三十手前にしてすでにバツ二となれば突っ込まれても当然だが。「どうも何も順調に進んでるさ」

お通しの小鉢はブリ大根だった。早速口にすると、ブリの旨味が染みた大根は柔らかく甘い。

「それで？ 今回で打ち止めとかじゃないわけ？」

「政略結婚だ。いつものように用が済めば解放して終わりだよ」

仁はにやりと口元を歪める。

「相手は短い結婚と引き換えに多額の慰謝料を手に入れる。女性のほうも悪い話じゃないってわけか」

少なくとも二度の離婚はそうだった。良くも悪くも合理的だった彼女たちは、提案をすんなりと受け入れたし、ウィンウィンだった関係に後腐れも罪悪感もない。ただ――

胸に疼くつかえが言葉となり、思わず「彼女は違う」と口を突いて出た。

桐原美咲はごく普通の家庭の娘だ。過去の妻たちのように、生まれながらにして上流階級の考え方が身についているわけじゃない。自分が政略結婚をすることになるとは夢にも思っていなかったはず。

隼人自身は腹黒いと言われようが泥まみれになろうが構わないが、関係のない彼女が悪女のように言われるのは困る。彼女には未来があり、一年後には本来いる場所に帰る善良な女性なのだ。名誉を傷つけるわけにはいかない。

それくらいの良心は隼人にもあった。

「彼女はごく普通の女性だ。俺が強引に首を縦に振らせたんだよ」

「ん？ 何？ どういうこと？」

興味津々に目を輝かせる仁に、腕の傷を見せて昔話をして聞かせた。

「あー、その腕の傷。なるほどそうだったのか」

「彼女は俺に罪悪感を抱えている。結構な血が出たし、しばらく入院する羽目になって、なんだかんだで結局その日以降学校に行かないまま渡米した。そもそも町田にはその時期しかいなかったしそれきり会っていなかったが、当時、彼女は責任を感じて何度も手紙を寄越してきたんだ」

隼人は渡米してから手紙の束を渡された。忘れていたのか、しつこいラブレターと勘違いしたの

か、親が止めていたらしい。

「へえー、偶然の再会ってわけか」

「そういうこと」

彼女があの子だと知ったのはつい最近だった。

キリ原の技術はどうしても欲しい。しかしその技術に目を付けたのはアマグサスだけじゃない。

虎視眈々^{こしたん}と狙う企業はいくつもある。

当初はライバル会社のほうが優位に立っていた。アマグサスは技術を買収する方向で話を進めていたが、ライバル会社は違って、共同開発を申し出ていた。まだ新しく規模が小さいスタートアップ企業だけに小回りが利くし、キリ原の意見が通りやすい。金銭面ではアマグサスが上回るが、^{共に}と強調されて心を惹かれたらしい。桐原社長はそちらに傾いていたようだった。

安定的な将来性を強調し、社長の弟である専務は抱き込めたが、社長はなかなか首を縦に振らない。

『いっそ娘でもいれば政略結婚という手段もあるんだが』

ある時隼人は何気なくそうぼやいた。結婚まで持ち出せば本気度が違うとわかってもらえる。そのぼやきを秘書が聞いていて『いますよ、美人なお嬢さんが』と言った。それが彼女だったのだ。

「偶然が偶然で終わるのか――」

「ん？」

ちらりと仁を見ると、彼は意味深に口角を上げる。

「まあ、飲めよ。明日休みだろ？」

仁が熱燗とお猪口ちまぐちを並べる。つまみはカラスミに白子しらこのボン酢和えと、酒が進むものばかりだ。何を思ったのか、仁はそれ以上聞いてこなかった。

偶然に意味などない。もう痛くもない傷一つで脅迫まがいに結婚を迫ったのだ。縁があるとすれば悪縁だ。少なくとも彼女にとつてはそうに違いない。

カラスミを口にした時、ああそうかと、しこりの原因に気づいた。

『あんたなんか大嫌い！』

いつそあの時のように睨んでくれれば、こんな気持ちにはならなかったはずだ。怒りを全面に出してくれさえすれば。

なのに、彼女は思いもよらない表情を見せた。

悲しいのは少し違う。何かをあきらめたような、寂しそうな彼女の微笑みがやけに胸をざわつかせ、痛くないはずの腕の傷跡がじんじんと疼いた。

パソコンのモニターから視線を上にならずらし、美咲は小さな窓から見える空をぼんやりと見つめた。青空ならいくら気も晴れるだろうに、重々しい曇天にますます気が滅入めいれいる。

お見合いをした日からかれこれ一週間が経ち、話は順調に進んでいる。その後隼人とは二度ほど

会っていて、昨夜は彼と食事をした。

『Kirariデザインでの仕事は続けたいと思うのですが』

『どうぞ。好きにしたらいい』

恐る恐る聞いたのに、彼の返事はあっさりとしたものだった。

（ほんとーに、私には興味ないのねー）

食事をした場所は夜景が見下ろせるホテル高層階のレストラン。雰囲気こそ婚約中の二人にぴつたりだというのに、交わされた会話は事務的で、まるで仕事の打ち合わせのようだった。

『結婚式は君が望むなら大々的にしようと思うが、やりたいか？』

思わず（おい）と心で突っ込んだ。そんなふうに言われたら、やりたいなんて言えやしない。

言われなくてもわかっている。どうせ離婚前提なのだからやる意味はない。できることなら結婚そのものを誰にも知られずに終えたいくらいだ。

にっこり澄まして『できればひっそりといいです』と答えた。

三月上旬に料亭の一室で親族だけの小さな結婚式を挙げ、記念写真を撮ると決まった。その後、一緒に住むことになる。

欠片も愛のない、形だけの結婚だちゃんと理解している。それなのに――

『脅迫だってなんだってする。君と結婚するためにはな』

あのセリフを思い出すと、うっかり胸がときめいてしまう。

（だって、あんなにイケメンなんだから）

少年時代とは雰囲気はまったく変わってしまったけれど、違う意味で彼はとても素敵な大人の男性になっていた。色気というかなんとか、秘めた熱が瞳の中で妖しく燃えるような……魅力がそこかしこから溢れている。

口から出てくるのはガツカリ発言ばかりだけれど、態度はアイスクリームのように甘い。

エレベーターは当然のように美咲を優先させ、彼が降りるのは後。車も助手席のドアを開けて美咲が乗ってから彼は運転席側に回って乗る。『寒くはないか?』と気にかけてくれて、歩調は美咲に合わせてゆつくりと。流れるように自然なレディーファーストに胸がキュンと疼いてしまう。

送ってもらった車の中で、美咲はふと聞いてみた。

『テニス、今でもやったりするんですか?』

『大学の頃までは時々。もう何年もラケットは握っていない』

『忙しいですもんね』

彼は、美咲の父とゴルフの約束をしていた。接待ゴルフの時間は作れても、昔のようにテニスをする暇はないのだろうか。

『そういえば、昔一度だけ一緒にテニスをしたな』

『はい! すごく楽しかったです。下手でしたけど』

口角を軽く上げてフツと見せた微笑み。ネクタイを少し緩める仕草。一つひとつを思い出すだけでついうつとりしてしまう。

そんな自分に驚いた美咲は、デスクの上のカップを取り、冷めきったコーヒーを勢いよく飲んだ。

(危ない、危ない)

イケメン恐るべし。

ふうーっと息を吐いて気持ちを落ち着けた。

それにしてもイケメン少年が成長するものすごいイケメンになるのねと感心するばかりだ。とにかくやたらとかつこよかったからなあと、再び考え込む。

中学生だったあの時――

大嫌いと呼んだ瞬間、美咲の幼馴染、良和に馬乗りになっていたタカ先輩の動きが止まった。その拍子に良和の渾身の一発が彼の頬に入り、倒れた先に石があり、それがちょうど角で。腕が当たって彼は大怪我をした。

美咲は大慌てで医務室に走り、保健の先生を呼んできたが、彼はすでにその場から消えていた。良和の話では怪我した腕を押さえたまま行ってしまったという。その場に残された大量の血に保健の先生は驚愕し、大騒ぎになったのは言うまでもない。

その後、大事にしたくないという彼の意向もあり、良和も注意されただけで済んだ。先生の話によると、タカ先輩の渡米は家族の都合で以前から決まっていたらしく、怪我を機に予定を早め、学校には戻らずに渡米したそうだ。その後町田の家は引き払ったらしい。

美咲はとにかく会って謝りたいと先生に言ったけれど却^{かえ}って話をややこしくするからと止められて、先生を介して何度か謝罪の手紙を送った。返事らしきものが来たのはそれから数カ月後。学校ではタカ先輩を恋い慕う声が薄れてきた頃だ。届いたのは自由の女神像の絵ハガキ一枚で、言葉は

一言も書かれていなかった。

それでもすぐうれしかった。美咲への宛名は手書きで、彼が怪我した腕は利き腕の右腕だったから、文字がちゃんと書けるんだとホッとしたのを覚えている。後遺症が残るような怪我じゃないとは聞いていたが、ずっと心配だったから。

チリチリとした罪悪感はその一枚の絵ハガキで少しばかり薄らぎ、淡い恋と後悔と悲しみは、月日が経つとともに霞^{かす}んでいった。

あの時なぜ彼らは喧嘩になったのか。そもそも自分は喧嘩の理由を知っていたかどうかも今となつては思い出せない。

（あのタカ先輩と、まさかの契約結婚か……現実味がないなあ）

両親には何度も念を押されて、そのたびに『話を進めて』と元気いっぱい答えている。

『美咲、本当に無理してない？ 別に断つてもいいのよ？』

『お母さん、実はね隼人さんは中学時代の先輩で、私の憧れの人だったの』

『まあ、そうなのね』

むしろ夢のような話にわくわくしているみたいに瞳を輝かせて、明るく笑ってみせた。本人がそんな調子なのだから、両親がそれならばと重い腰を上げるのも当然で話は順調に進んでいる。でも本当は――

「はあー」

盛大なため息が口から漏れたと思いきや、それは隣の席から聞こえてきた。

「どうしたの？」

そう尋ねると、隣の席の小野^{おの}が背もたれに体を預けて呆けた顔をしている。彼は二歳年下の後輩だ。

美咲の勤務先であるK&Hデザインは、企業のホームページやウェブコンテンツのデザインを請け負う会社で五十人ほどの社員がいる。アラサーが中心の若い会社で美咲はちょうど中間層だ。小野の教育担当が美咲だったのもあって、かれこれずっとサポートしている。

小野はくるくるした天然パーマの髪と愛嬌^{あいきょう}があるかわいい顔をしているので、密かに「子犬ちゃん」と呼んでいた。

「桐原先輩、いきなり結婚とか、反則っすよ」

ああ、そのことかと美咲はため息を吐いた。

先日、職場に結婚の報告をした。相手については伏せたまま、親戚が持ってきた縁談だと伝えている。

「どうしてよ」

「だって、桐原先輩。飲み会だって気づくとさっさと帰っちゃうし、全然男つ気なかったじゃないですかー。恋愛に興味ないって言ってましたよね」

小野は恨めしげに美咲を睨む。

彼の言う通り、社内恋愛には抵抗があった美咲は、小野に限らず職場の男性全般に対してすると逃げ回ってきた。恋愛に興味がないわけではなかったが、いつしか恋愛そのものにも目を背け

ていた。ノーサンキュー私を誘わないでとばかりに、言葉でも態度でも示してきたのだからそう言われても仕方がない。

「結婚には興味あったの」

「嘘だ。ずっと独身でいようねーって約束したじゃないですかー」

したかもしれない。きつとしたと思うが、ここは「そうだっけ？」とごまかした。

「何よ。私が結婚しちゃ悪いって？」

向かいの席の先輩が「小野ーあきらめろー」と笑った。

「で？　どんな人なんです？　写真ないんすか？」

懲りない小野は顔をしかめたまま美咲を睨み続けた。

「ないよ」

「嘘だ！」

隣の席から身を乗り出すようにして、小野はさらに食い下がる。

「じゃあ、相手のどこが気に入ったんですか」

うーんとしばらく考え込み、「顔？」と答えた。

絶句する小野に「冗談だよ」と笑う。とはいえ、嘘でもない。いくらキリ原のためとはいえ薄気味悪い男だったら、こうして笑ってはいられなかったはず。

（イケメンは正義なのだ）

「僕だって顔には自信あったんだけどな」

まあ確かにね、と心では頷く。子犬ちゃんかわいい。社内の女性たちにも好かれているし客先でも評判がよくモテる。とはいえ彼を恋愛対象として考えたことは一度もないけれど。

「バカなこと言っていないでほら、急がないと終わらないでしょ」

美咲の結婚相手が誰なのか、職場の人間は誰も知らない。

親戚が持ってきた縁談だとして報告していないし、個人情報保護に厳しい昨今、相手について細かく聞いてくる人もいなかった。

他人の結婚相手にそこまで興味はないと思うが、それでももし相手の情報が明るみに出れば大騒ぎになるに違いない。想像するだけで恐ろしいのでこのまま隠し通すつもりだ。

口を尖らせた小野がパソコンに向かい、美咲も気を取り直して仕事を再開する。

モニターには、キリ原製作所の通販サイトが表示されていた。

Kitariデザインに就職した理由は、何かの形でキリ原製作所の力になったからだった。美咲が就職した当時、キリ原は細やかに業績を伝えるシンプルなホームページしかなく、ずっと気になっていた。晴れてWEBデザイナーとなった美咲は、営業に働きかけキリ原製作所と契約をして、そのままホームページの作成のほかオンライン販売の管理も任されている。

キリ原の技術を生かした小型ポータブルバッテリーや町工場ならではのカスタムメイド蓄電池など、美咲がアドバイスをしてデザインにもこだわり、順調に実績を積んでいる。

これからのキリ原のために精一杯頑張っていくつもりだ。そうだよ、と美咲は自分を励ました。

(キリ原のためだもの。どうってことないわ)

結婚した相手がどんなに冷たくても一年だけの辛抱だ。それで家族皆が幸せになれるのなら安いものである。

帰り道、買い物しようとして少し遠出をして歩いていると、ふいに「美咲さん」と声をかけられた。

「あ、専務」

彼はキリ原の技術を欲しがり、アマグサスとは最後まで競ったライバル会社の専務だ。仕事で何度かキリ原に行った時に会っている。名前はすっかり忘れたが、笑顔が爽やかな感じのいい人で悪い印象はない。彼の会社はスタートアップ企業ゆえに役員も若く、彼自身もまだアラサーだ。

美咲よりも十センチほど背が高く、肩幅がしっかりある体型なのでダークグレーのスーツがよく似合っている。よく日焼けしていて精悍な顔立ちゆえに体力はありそうに見えるが、自然に流したセンター分けの髪は乱れ、走ってきた彼はぜえぜえと息を切らしている。

「大丈夫ですか？」

「は、はい。大丈夫です」

何か大事な話でもあるのだろうかと思しき顔で、案の定彼は「あの、お茶でもどうですか？」と誘ってきた。

「お茶……ですか」

「少しでもお話を、させてください」

すぐ目の前に店内が明るく見渡せるカフェがある。

「では、そこで」

彼の用事が気になり誘いに乗った。

「ありがとうございます！」

「いらつしやいませ」

店員の明るい声に迎えられた店内には、仕事帰りと思われる女性客がちらほらいて、美咲たち二人は窓際の席に案内された。

専務に「よろしければ食事も」と言われたがそれは断り、ホットミルクティーを頼む。考えすぎかもしれないが、婚約中の身ゆえに男性と二人きりで食事という気持ちにはなれない。

「美咲さん、アマグサスの天城さんと結婚するというのは本当ですか？」

驚きつつもなるほどその話かと納得した。そのニュースは、キリ原とアマグサスが手を組むことを意味する。どこからか噂を聞きつけて確認したかったのかもしれない。

美咲は「ええ」と、にっこり微笑んだ。

「考え直してください」

いきなりの発言に面食らう美咲を尻目に、彼はいたって真剣な表情で畳みかけてくる。

「あなたは利用されているだけだ。彼には過去二回の離婚歴がある。天城のやり方は強引で汚い。過去の政略結婚のように、あなたは利用されて捨てられるんですよ」

それを言うなら、たいして親しくもないのに美咲と名前で呼んでくるあなたのほうが失礼じゃないか、と内心ムツとする。おまけに捨てられるとは酷い言い草だ。

(違うわよ、契約よ！ 対等な契約なんだから)

大きなお世話だと反論すべきか。わかっていまずと微笑むべきか。どうしたものか。ため息を吐きつつ迷う。

「結婚で安心してもらえるなら、僕のほうが美咲さんを」

「へっ？」

今度は何を言い出すのかと、驚きのあまり息を呑んだ。

「僕は離婚歴ありませんし、交際している女性もいません。誠心誠意美咲さんに尽くします。あの男のように愛人を侍らせたりしません！」

テーブルが小さいせいで身を乗り出してこられると圧がすごい。ギョツとして思わず椅子を後ろに引いた。

「僕じゃダメですか！」

「お、落ち着いてください専務。とにかく落ち着いて」

ちょうどそこに店員がミルクティーとコーヒーを持ってきたので、彼もいくらか冷静さを取り戻した。

「すみません……」

こんなことなら誘いを断ればよかったと後悔しながら、美咲はひとまずミルクティーに手を伸ば

す。さあどうしたものか。ミルクティーを飲んだらそのまま席を立とうかと考えてふと思いついた。縁談がある少し前に父が『専務はどうだ美咲。彼はいい男だぞ』と言っていたのだ。

もしかすると父は、美咲と彼を引き合わせるつもりでそんなことを言ったのかもしれない。

隼人といい専務といい皆それほどキリ原の技術が欲しいのかと、心密かに苦笑した。

(私と結婚したいわけじゃなくて、キリ原と結婚したいのよね)

「お気持ちはあるがたいですが、天城さんとの結婚は決まったことです。無事に婚約も済ませましたしね」

美咲はにつこりと笑みを浮かべて、再びミルクティーを口に含んだ。これ以上彼の話を聞いても仕方がない。このひと口を最後にカップを置いて席を立とうと決めた。

「悔しいです。美咲さん、僕は——」

「ちよつ、ちよつと待つてください。その話はもう」

今にも泣きそうに見える彼の様子に、ミルクティーを嘔き出しそうになりながら慌てて制した時だった。

コンコンとガラス窓を叩く音がして——

音がしたほうを見ると、隼人がいる。

(ひいー)

黒いコートを羽織った彼は、怒った表情をしているわけでも冷たい目をしているわけでもなく、ガラス越しに真っ直ぐ専務を見下ろしていた。

それが逆になんとも不気味で恐ろしい。

明るい店内からは外はよく見えないのでまったく気づかなかったが、いったいいつから彼はそこで自分たちを見ていたのか。

哑然とする美咲以上に専務はショックを受けたらしい。面白いほど顔を青くしている。それもそうだろう。今の今まで彼を女好きのろくでなしのように罵^{のの}っていたのだから。

慌てふためきつつ専務は「すみません」とぺこぺこ頭を下げて席を立つ。

「か、会計は済ませておきますので、どうぞごゆっくり」

返事をする間もない。脱兎のごとく店を飛び出した彼は、その後隼人に挨拶をしたのかしないのか、美咲の目に留まることなく消えていった。

入れ替わるように、隼人が颯爽と店に入ってくる。

専務も身長は高いイケメンなほうだが、彼はレベルが違う。ちょっとやさそつとじゃお目にかかれなほどのスター性を全身に漂わせている。店の中の空気が一瞬で変わるほど人目を惹いた。

歩いてくる途中店員に声をかけた彼は、真っ直ぐに美咲がいる席まで来た。そして専務が座っていた席に腰を下ろす。

緊張を作り笑いで隠し、ひとまず「こんばんは」と挨拶をした。

「こんばんはじゃないだろう。あの男に何を言われたんだ」

彼は眉をひそめて美咲を睨むが、バカ正直にあなたの悪口ですなどと言えるはずもない。

「いえ、別に？ 世間話をしていただけですよ」

「じゃあどうしてあの男は逃げたんだ」

それはあなたが怖いからに決まっているじゃないですか。と胸の内をボヤク。

（専務も専務よ。本人に直接言っただけいいのに）

情けない男め、と密かに毒づく。

「それより、何かご用ですか？」

言うだけ言ってカップに手を伸ばす。やけに喉が渴いた気がして、少し冷め始めたミルクティーをごくごく勢いよく飲んだ。

「別に。通りかかったら、俺の婚約者が『恋敵』といちゃついているように見えただな」

「なっ」

驚きのあまり、紅茶にむせてしまった。

「あーあー、大丈夫か？ ほらハンカチ」

差し出されたハンカチを口にあててゲホゲホと咳き込む。

「ありが、とう、ございます……」

いや、お礼どころかむしろ悪態をつくところだと思いがちながら、なんとか持ち直した。

「言われたんだらう？ あの男と結婚するくらいなら、俺と結婚してくれとか」

（うわっ、どうしてわかるの？ 同類の匂いを感じたとか？）

とは言っても向こうは所詮スタートアップ企業の専務。大企業という虎の威を前に、一目散に逃げた彼が気の毒になり、あははと笑い飛ばした。